青海原ふりさけみれば——土佐日記の阿倍仲麻呂の歌

遠田晤良

はじめに

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

藤原定家の「百人一首」（小倉山荘色紙和歌）によって人口に膾炙したこの歌は、その昔遣唐留学生として唐にわたり、ついに帰国できずに、代宗の大暦五年（七七〇、日本光仁天皇宝亀五年）彼の地に客死した阿倍仲麻呂の望郷の思いを今に伝える。また、日中交流の長い歴史を顧みるとき逸することのできない、仲麻呂の事跡を背景に持つ歌である。

この歌は「唐土にて月を見て、よみける」という題詞をもって『古今和歌集』巻第九、羇旅歌の部の巻頭に置か

れている。さらに次のような左注が付され、作歌事情が物語られている。

この歌は、昔、仲麿を、唐土（もろこし）に物習はしに遣はしたりけるに、数多の年を経て、え帰りまうで来ざりけるを、この国より又使まかり至けるにたぐひて、まうで来なむとて出で立ちけるに、明州と言ふ所の海辺にて、かの国の人、餞別（うまのはなむけ）しけり。夜に成りて、月のいと面白くさし出でたりけるを見て、よめるとなむ語り伝ふる。[*1]

この歌の作歌事情については、はやく香川景樹が、送別の酒宴の歌とは思われないとして、左注に疑問を持ち、詞書だけで見るべき歌であって、かの地で、いつの日か大和を恋しく思った時に詠んだ歌にちがいないと評した。左注によって作歌事情が補足されることで、改めて感動をかきたてるところ大であるが、左注がいうように送別の宴席の歌であるとするには、惜別の思いが表現されているわけでなく、部立てと作歌事情の間に乖離がある。

この歌が詠まれたときの状況がはたしてこの左注の伝える通りなのか、さらには、この歌ははたして仲麻呂の歌であるのか、仲麻呂の歌だとしても正確な歌形で伝えられたものなのか等々、この歌にはこれまでさまざまな疑問が投げかけられ、議論を呼んできた。近代になって、日中交流史の細密化、遣唐使研究の進展にともなって、仲麻呂の伝記的考証が深化されるにつれ、この歌とその作歌事情が強い関心を集めてきた。

特に、小川環樹氏が、A・ウェイリーがその著書『李白――その詩と生涯』[*2]の中で、この歌の作歌事情に疑問を呈していると紹介したことが、議論を活発にする契機となった。ウェイリーの疑問は「ほんの子どもの時分に日本を離れて、それ以後ずっと中国に住んで一生を終えた仲麻呂が、明州（すなわち今のニンポー）を出帆するさいの送別の席で、和歌を作ったということは、いささか奇異である」という。そして付け加えて「ひょっとしたら原作は漢文で書かれ、その日本語のversionは誰かほかの人の手に出るのではなかろうか」というものである。

小川環樹氏は、ウェイリーの疑問をはなはだ示唆に富むものと受け止められ、自ら臆説としながら「『天の原』の和歌は、或いは仲麻呂自身の作ではなくて、かれの死後に生じた伝説の中に在ったのではなかろうか」[*3]とされた。

これに対し、昭和一七年当時仲麻呂の事績を詳細に考証された杉本直治郎氏は、後に、「できるだけ具体的に考えてみた結果、仲麻呂自身の作と見なすほかな」いと反論された。[*4]

A・ウェイリーが「ほんの子どもの時分に日本を離れて」というのは「古今和歌集目録」の「霊亀二年以選為遣唐留学問生。時年十有六。」を仲麻呂入唐の年齢と解したからであろう。「明州」での送別の席でというのは、あくまでも古今集の左注に基づいての疑問である。

仲麻呂の帰国に当たって、送別の宴で詠まれたというこの歌の作歌事情は、左注末尾に「となむ語り伝ふる」とあるように、すでに古今集編纂時、或いは左注が記入された時期には半ば伝説化されていたものである。桜井満氏が「古今集が伝える仲麻呂の『天の原――』の作歌事情は、〈歴史上の事実〉ではなく〈伝承の事実〉としてみるべきなのだ」[*5]というとおりである。

古今集の左注は、古く荷田在満以来、すべて撰者のものではなく、後人の注の竄入であるとする考えが根強い。仲麻呂のこの歌の場合も例外ではなく、後人注記竄入説の立場からは、「土佐日記」の記述をもとに、後人が注記したものと考えられている。[*6]にわかに先後を決することはできないが、左注が「土佐日記」の影響下にある可能性は高い。

紀貫之が後年古今集左注と同じような作歌事情を物語って、この歌を『土佐日記』に取り上げながら、初句を「青海原」と変えて、

青海原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

としていることは周知のとおりである。

仲麻呂の死から古今集編纂の時までほぼ一三五年の歳月が流れている。土佐日記が書かれた時を承平五年（九三五）とすれば、すでに一六〇年以上の後のことである。左注が土佐日記の記述をもとにしているとすればさらに後年のこととなる。古今集左注も土佐日記も仲麻呂の死からはるかな時間を経ていることでは、大きな差はない。仲麻呂の歌の作歌事情をめぐる伝承がはたして事実をどこまで正しく伝えているものか不明である。

この稿は、この伝承を検討しながら、貫之「土佐日記」が「天の原」の歌を「青海原」と改変した事由について考察しようとするものである。

一　仲麻呂の詠歌

「天のはら」の歌は、例えば、

「天空はるかに望み見ると、今しも月が美しく澄み上っている。ああ、この月は、かつて故郷の奈良、春日にある、あの三笠山に出た月なのかなあ。（さても、さても、心懐かしいことであるよ。）[*7]」のように解釈される。

「大空はるかに眺めやると、春日にある三笠山を出た月が今輝きだして来たことだ」とする池田弥三郎氏の解釈があり[*8]、清輔本『古今和歌集』の傍注、藤原教長『古今集注』に「みかさの山に出でし月かも」が「ミカサノ山ヲイテシツ（キ）カモ」とあることをもとに、古今集本来の原形が「みかさの山を」であるとする杉本直治郎氏の説

もある。[*9] しかし、この歌の「出でし月」の過去の助動詞を重視すれば、やはり、現在の嘱目の月に過去の思い出の月を重ねての感慨と解するべきであろう。

「ふりさけ見れば」という連用修飾語を受ける語は、「今しも月が美しく澄み上っている」という意味の語句になるはずであるが、それは省略されている。「ああ、この月は・・・・春日にある三笠の山に出た月なのかなあ」という過去への詠嘆が、眼前の月をも受け手に想像せしめ、二つの月が一つに重なるのである。日本と唐土、過去と現在の時空が二重にかさなって、長の年月異境にあったものの望郷の思いが表現されている歌である。

しかし、望郷の情は余情として感じられるのであり、言葉にも景にも直接述べられている訳ではない。望郷の歌と感じさせるには「唐土にて月を見て、よみける」という詞書きが不可欠である。詞書きがなければ波濤万里を越えた異国の空で故郷を思うとは、簡単に理解できない。「出でし月かも」という過去の景を重ねての詠嘆も、国内を旅する者の懐旧、望郷の思いであっても成り立つ歌である。

「振りさく」は遙か遠方を仰ぐ意で、「振りさけ見る」は「天の原」を枕詞とすることが多い。「春日なる三笠の山」は、「奈良の都を象徴する連語となっているが、これに月を取り合わせることも常套の手段で、後世の春日曼陀羅の構図が正にその通りであった。[*10]」と言われるように、「天のはら振りさけ見れば」も「春日なる三笠の山」も万葉集には例歌が多く、慣用句といっていいものである。

天の原振り放け見れば大君の御寿は長く天足らしたり　（巻二、一四七）

天の原振り放け見れば白真弓張りてかけたり夜道はよけむ　（巻三、二八九）

天の原振り放け見れば天の川霧立ちわたる君は来ぬらし　（巻一〇、二〇六八）

天の原振り放け見れば夜ぞふけにけるよしゑやしひとり寝る夜は明けば明けぬとも（旋頭歌）　（巻一五、三六六二）

天地の分かれし時ゆ・・・天の原振り放け見れば渡る日の・・・（長歌）　（巻三、三一七）

我が背子は待てど来まさず天の原振り放け見ればぬばたまの夜もふけにけり・・・（長歌）　（巻一三、三二八〇）

天地の遠き初めよ・・・天の原振り放け見れば照る月も満ち欠けしけり・・・（長歌）　（巻一九、四一六〇）

春日なる三笠の山に月の船出づみやびをの飲む酒杯に影に見えつつ　（巻七、一二九五）

春日なる三笠の山に月も出でぬかも佐紀山に咲ける桜の花の見ゆべく　（巻一〇、一八八七）

春日なる三笠の山に居る雲を出で見るごとに君をしぞ思ふ　（巻一二、三二〇九）

雁がねの騒ぎにしより春日なる三笠の山は色づきにけり　（巻一〇、二二一二）

いわば、「天の原」の歌は二つの慣用句を合成して成り立っている歌なのである。万葉の歌と共通する表現をとりながら、きわめて古今集的な流麗な調べになっていることも注意される。古今集撰者だけでなく、後世、公任や俊成、定家が秀歌として取り上げるのも、おおらかでありながら流麗な古今調であることに秘密があろう。

先述のようにこの歌が慣用句を連ねた表現であることは、それゆえに異国にあって多年歌を詠むこともなかった仲麻呂にふさわしいのだともいえるが、慣用句を連ねるだけで成る歌であることを常識的に考えれば、この歌は仲麻呂自身のものではないとしなければならない。

しかしながら、一方、春日山麓が遣唐使発向に先立ち渡航の無事を祈願する斎の場であったことは「続日本紀」の記述や[*11]、「万葉集」の歌[*12]によって明らかである。さらに三笠山の地が阿倍氏一族に関わりの深い土地であるとい

う史家の指摘からは、「三笠山の月」は遣唐留学生として祈願した若き日の、仲麻呂の記憶に強く結びついた特別な意味をもつものとしなければならず、仲麻呂でなければ歌いえない歌であるという側面もある。[*13] しかし、餞宴の場で詠まれた歌という物語をもちながら詠歌の内容がそれと乖離している点を考えれば、仲麻呂伝説の成長過程で伝誦歌が取り込まれていったと考えられるのである。現段階では小川環樹氏が仲麻呂自身の作ではなくて、かれの死後に生じた伝説の中に在ったのではなかろうかとした推測を妥当なものとすべきであろう。

二　土佐日記の仲麻呂歌

「土佐日記」における阿倍仲麻呂の歌語りは、承平五（九三五）年一月二十日、室津でのこととして、次のように語られている。

廿日の夜の月出でにけり。山の端もなくて、海の中よりぞ出で来る。かうようなるを見てや、昔、安倍の仲麻呂といひける人は、唐土に渡りて、帰り来けるときに、船に乗るべき所にて、かの国人、馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしこの漢詩作りなどしける。飽かずやありけむ、廿日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。これを見てぞ、仲麻呂の主、「わが国にかかる歌をなむ、神代より神も詠ん給び、いまは上中下の人も、かうやうに別れ惜しみ、よろこびもあり、悲しびもあるときには詠む」とて詠めりける歌、

青海原振り放け見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

とぞ詠めりける。かの国人、聞き知るまじく思ほえたれども、言の心を、男文字に様を書き出だして、ここの言葉伝へたる人に、言ひ知らせければ、心をや聞きえたりけむ、いと思ひのほかになむ賞でける。唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。[*14]

土佐日記において仲麻呂の歌の初句を「青海原」としたのは、一般に、「天の原」以外に異伝が存在したと考えるよりは、貫之が「当夜の状況に合わせて当意即妙に改変」[*16]したものである。「眼前の景に合わせて変えたのであろう」[*17]と考えられている。

改変の結果を見れば「当夜の状況」に適っているし、「眼前の景」に合っているのは確かであるが、しかし、古今集撰者の一人であった貫之が、古今集に仲麻呂の詠歌と明示した歌を簡単に改変するであろうか。土佐日記が女性に仮託した自由さを持つ作品であるとしても、それゆえに気安く改変したとは考えられないことである。そこには貫之のどのような心的必然があったのであろうか。

土佐日記の記述は、古今集の左注と比較して、仲麻呂が眺めた月が「二十日の夜の月」であること、「船に乗るべきところ」で餞けの宴があり、「漢詩作りなど」していたこと、「かの国人聞き知るまじく思ほえたれども、ことの心を、男文字にさまを書きいだして、ここのことば伝へたる人に」解説させたと当日の様が具体的で、臨場感を強調した説話的な記述になっている。それでいて、仲麻呂本人についての記述は、遣唐使に随行して渡唐し「数多の年を経て」帰国しようとしていたことや、送別の宴が「明州」で開かれたことなどは言及されず、日本語を解さない異国の人にも歌の心が理解されたことを述べるに急である。

歌というものが、神々から継承した神聖なものであり、「力をもいれずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神を

も哀れと思はせ」、普遍的な感動の中から生まれるものであり、言葉の障壁をも越えて共感されるものという貫之の和歌観を、船旅のエピソードの形をとって、伝えることに主眼がある。萩谷朴氏が指摘するように、土佐日記には貫之の抱いていた歌論が全編にわたって組織的に述べられているのであり、歌論展開が主題の一つであったことは確かである。筆者を女性に仮託して書き始められた日記も、このあたりでは仮面を取り去った貫之自身が顔を出しているところであり、仲麻呂の歌をめぐる伝承が歌論展開の格好の材料として取り上げられているのだといえよう。

この段について萩谷朴氏は、仲麻呂自身が、このような「和歌文学の解説を試みたり、翻訳説明をしたというような詳しい事情が、日本に伝わっていたとは考えられない。これはすべて、貫之が虚構した」ものであるとする。その理由として「在唐三十余年に及ぶ仲麻呂が、いよいよ帰国離別という今はの際になって、初めて和歌文学の紹介を試みたということも不審である」とし、さらに、「十分現地の言葉に練達していたはずの仲麻呂が、筆談や通訳を得て初めて自作の和歌のニュアンスを説明したなどということも、事実としてはあり得ないことである[*18]」と不合理を列挙するのは、きわめて筋の通った判断である。

貫之ら一行は十二日に室津へ到着して以来、天候待ちを続け、この港にとどまっていた。十七日に一旦船を出したが風雨のため引き返して、依然として室津に滞留していた。室戸岬の難所を越えるべく慎重に良い日和を選んでいたのであろうが、「苦しく、心もとなければ、ただ日のへぬる数を、今日幾日、二十日、三十日と数ふれば指も損なはれぬべし」といい、そのため夜も寝られず出の遅い月を見ることになる。この室津の港でいたずらに十泊する焦燥のなかにあって、都恋しい今の気持ちを、昔の仲麻呂の望郷の念に重ねるのである。

この辺りは、「十五日、今日二十日あまりへぬる。いたづらに日をふれば」。「十六日、風波やまねば、なほおなじところに泊まれり」。「十七日、（一旦船を出して途中から引き返す）」。「十八日、なほおなじところにあり」。「十九日、日悪しければ、船出ださず」。「二十日、昨日のやうなれば船出ださず」とあるように、帰心に苛立ち明月に鬱情を晴らす貫之の心情と、仲麻呂の望郷の念とがぴったり重ね合わされている。

萩谷氏は、十七日に船を出して荒天の恐れから船を引き返したのは、室津ではなく、室津よりは室戸岬に近い津呂の港であったはずだとする。しかし、津呂の港は氏がいうように「後背すなわち東方は、山が海岸に迫っていて、水平線から月の出を見るということは絶対にあり得ない」とすれば、貫之が「山の端もなくて、海の中よりぞ出で来る」としたのは全くの虚構としなければならなくなる。事実氏は「現実の地理的条件とは関わりなく、仲麻呂帰国の際の故事を語り出す前提として」碇泊港を明記せず、津呂の港の環境を仮設して「二十日の夜の月を東方の海上から出させることにしたのだ」という。

しかし、貫之の表現意図は月の出の景の偶然の一致を歌論展開の好材料とするだけではなく、深浅の差はあれ仲麻呂の望郷の念への共感を表現することにあったはずである。出発以来すでに三十日、室戸岬の難所を前にして貫之等一行が味わった焦燥と望郷の思いが仲麻呂に思いを馳せる心的契機になっているのである。

それにしても、仲麻呂の歌「天のはら」を「青海原」と改変したのはなぜであろうか。

「天の原ふりさけみれば」の句が万葉集には珍しいものではなく、多くの例をもつ慣用句であることは先述のごとくであるが、「青海原」を初句に置く歌は、万葉集の中でただ一首しかない。

その歌は、

青海原風波なびき行くさ来さつつむことなく船は早けむ　（巻二〇　四五一四）

という大伴家持の歌である。この歌には、「二月十日内相の宅に於いて、渤海大使小野田守朝臣等を餞して宴せし歌一首」と詞書きが付されている。家持がはなむけの歌をよんだ遣渤海大使小野田守こそ、仲麻呂遭難後、最初に生存の確報をもち帰った人物である。この家持の歌と土佐日記の改変の間には何の関係もないであろうか。次に仲麻呂の史実との関わりに目を移して考えてみる。

三　仲麻呂の帰還

阿倍仲麻呂は、中国での名を朝衡といった。長安滞在三十六年にわたった天宝十二載（七五三・天平勝寶五年）冬、第十一次遣唐使の帰国とともに故国に帰ることを願い出た。仲麻呂はすでに五十六歳、秘書監兼衛尉卿の高位にあったが、玄宗皇帝は、帰国する遣唐使藤原清河と中国側の使節として同行することを許した。

この度の遣唐大使藤原清河は孝謙天皇の従兄にあたる。彼も仲麻呂とともに再び故国に帰り得ず唐土に没した悲運の人物である。また、この度の航海で唐僧鑑真が六度目の挑戦で来日を果たした。こうした日中交流史上の重要人物に関わる帰還であったために、この度の遣唐使帰還の歴史的事実は比較的明らかにされている。

帰還する藤原清河と同行した仲麻呂ら一行は、長安から南行して揚州に赴いた。古今集左注や土佐日記にいう送別の宴は、この年十一月十五日、左注にいう「明州」ではなく、蘇州の黄泗浦の揚子江上の船中でのことであると、杉本直治郎氏によって考証され[*19]、定説化している。主として、唐僧思託の筆禄を抄禄した淡海三船「唐大和上東征

伝」の関係記事の考察に基づくものである。

杉本論文は「十月十五日、仲麻呂は、遣唐大使藤原清河らの帰国するのに従って、楊州の延光寺に鑑真を訪ね、一行はその渡日を懇請して、許諾を得たので、遣唐帰還船の待っている蘇州に赴き、鑑真らの到着を待った。」十九日に竜興寺を脱出した鑑真らは、二十三日使船に分乗した。「かくて十一月十五日、いよいよ蘇州の黄泗浦から、舳艫銜んで四船が同発したところ、一羽の雉が、第一船の前を飛んだというので、当時の迷信に従い、その日は進行を見合わせることとし、たちまち碇をおろして、その夜は揚子江上で、一夜を明かし、明けて十六日、改めて出帆することにした」というものである。「仲麻呂の羇旅歌は」「江上に碇泊して、空しく一夜を過ごした、天宝十二載（七五三）、しかも陰暦十一月十五日の、実に満月の（この）夜であった」[*20]とする。

翌十六日に出帆した、大使藤原清河と同船した仲麻呂の第一船は途中難船し、遠くベトナムの驩州に漂着することになる。

「続日本記」によれば、使船第二船は十二月二十日薩摩国阿多郡秋妻屋浦に帰還し、副使大伴古麻呂の計いで第二船に同乗した唐僧鑑真等が来朝した。大伴古麻呂は、翌天平勝宝六年正月に入京して帰朝報告をしている。

続いて第三船（副使吉備真備）が紀伊国牟漏崎に漂着し、第四船（判官布勢人主）は翌年四月に薩摩国石籬に帰着した旨、太宰府から報告があった。

帰国かなわなかった第一船の仲麻呂と清河（唐では河清）は安南に漂着し、唐国に再入国した。盗賊の難に遭遇しながら辛うじて生き延びて、一年半も後の七五五年、仲麻呂は清河とともに再び長安に帰り着いたという。

この後、仲麻呂は七五六（至徳元）年の安禄山の乱に遭遇もしたが、粛宗皇帝の上元年間（七六〇―七六二）に

は、左散騎常侍、鎮南都護の高位にまで昇った。やがて大暦の初めに長安に帰り、七七〇（大暦五）年正月、七十三歳（「古今和歌集目録」、顕昭「古今集註」は七〇歳）で没したとされる。

この一連の歴史的事実に仲麻呂の歌を置くとき、その「天の原」詠作の日を十一月十五日と考証した杉本論文は、土佐日記の「二十日の月」とした貫之の記述を否定する。天宝十二載十一月十五日、皎々たる満月の夜の餞宴の歌とする事が定説化しているが、十一月ではなく、それより前、「十月二十日の夜の黄泗浦の海上にさし上った月こそ、正に仲麻呂をして望郷の一詠を発せしめた」として、貫之「土佐日記」の記述に信を置く板橋倫行氏の論がある。[*21]

板橋論文は「唐大和上東征伝」に依拠して、「天宝十二載十月十五日には仲麻呂は、藤原清河・大伴古麻呂・吉備真備らとともに揚州延光寺に鑑真を訪うてその東遊を乞うた。それに応じて、鑑真らは十月十九日に揚州を出で、江頭から船に乗じ、蘇州黄泗浦に向かったのであった。

十月十五日に揚州に鑑真を訪うた仲麻呂は、その二十日には鑑真らに先んじてすでに、乗船所たる黄泗浦に至ってゐた筈である。貫之が仲麻呂の見た月を二十日の月とするのはこの十月二十日のそれを措いてはない」というものである。

考えてみれば、「遣唐使船による鑑真等唐僧の国外渡航は、国禁を犯すものであった[*22]」。国禁を犯して日本へ渡海しようというその日、鑑真を擁して特別な緊張と危険を感じていた筈の一行が、揚子江上に餞の宴を張るであろうか。仲麻呂送別の宴は、鑑真等の到着を蘇州黄泗浦で待つ十月二十日のほうが合理性がある。「貫之が何らかの資料によって仲麻呂の月を望んだ日を熟知してゐたもので、大いに根拠ある説と做すべきものと考える」という板橋氏の説は一考に値する。「二十日の月」にはあながち貫之の創作とは言い切れないものがある。貫之がなんらかの

根拠を得ていた可能性はある。

仲麻呂・清河難船の後、最初に生存の確証が得られたのは、「続日本紀」に見るところ、天平宝字二年（七五八）九月になってのことであったと考えられる。九月丁亥（一八日）遣渤海大使小野田守等に伴って渤海国使楊承慶等二十三人が来朝、越前国に安置したとの記事がある。[*23] 十二月戊申（十日）の記事には小野田守が奏上した「唐国の消息」の詳細な情報がある。天宝十四載十一月の安禄山の挙兵とその戦況についての情報である。増村宏氏がいうように「小野田守が上進した『唐王賜渤海王勅書・副状』によって清河在唐の情報がもたらされ、清河の生存が伝えられた」[*24]のであり、仲麻呂の生存もまた確認されたのである。

「続日本紀」天平宝字三年一月丁酉、正六位上高元度を「迎入唐大使使」に任じ、二月癸丑、渤海国使楊承慶の帰国を送って「彼の郷より大唐に達り、前年の入唐大使藤原朝臣清河を迎へんと」送り出したのは、前年の清河生存の情報によるものである。しかし、この迎使は清河を迎える使命を果たすことなく、天平宝字五年八月に帰国している。

天平宝字四年には正月丁卯に朝見した渤海国使高南申が、「日本朝遣唐大使特進兼秘書監藤原朝臣清河上表」を献じたとあり、宝亀元年（七七〇）三月、新羅国使金初正が「在唐大使藤原河清・学生朝衡」の書簡を持参したことが「続日本紀」に見える。すなわち、仲麻呂の生存の証は藤原清河とともに、天平勝宝五年（七五三）の遭難から十数年にわたって、渤海、新羅経由でわずかに消息がもたらされていたのである。

こうして「続日本紀」の記述をたどってみるとき、古今集撰者のなかでもとくに万葉集を強く意識していたといわれる貫之は、家持の歌を当然想起できただけでなく、その題詞にいう、渤海大使小野田守が、仲麻呂生存の報を

日本にもたらした史実も知っていたであろうと考えられる。仲麻呂の歌の初句を「青海原」と改変した意図は、室戸での折からの景に合わせようというものであろうが、海から上る月を強調しようとして大伴家持の歌を直ちに想起したであろうし、そこに想い至ると同時に、家持の歌が渤海使として渡海する小野田守の出発を言祝ぐ歌であること、そしてその小野田守が阿倍仲麻呂生存の情報を最初にもたらしたという「続日本紀」の史実をも貫之は想起したと考えざるを得ない。「青海原」という歌語の選択と伝誦歌の改変の背後には仲麻呂ら遣唐留学生や遣唐使の苦難の歴史に思いを馳せる貫之の心情が存在する。

四　李白の哀悼詩

仲麻呂の船が難破して沈没し、彼が死んだと伝え聞いた李白が、「晁卿衡を哭す」と題する詩を作ってその死を悼んだことはよく知られている。

その詩は、

晁卿衡を哭す　　哭晁卿衡

日本の晁卿　帝都を辞し　　日本晁卿辞帝都
征帆一片　蓬壺を繞る　　征帆一片繞蓬壺
名月帰らず　碧海に沈む　　名月不帰沈碧海
白雲　愁色　蒼梧に満つ　　白雲愁色満蒼梧

という七言絶句である。

「日の本の晁衡殿は、わが国の都長安に別れを告げた、けれども、遠く旅立った船は波にもまれたあげく、蓬莱の島にたどり着くことが出来なかった。明月のようなあの人は、青海原の藻屑と消えて、無念や、国に帰ることはかなわなかった。白い雲が悲しみをたたえて、蒼梧の空を覆っているよ」という仲麻呂を悼む李白の真情は、改めて二人の交友の深さを考えさせる。

西域生まれの異民族出身ともいわれる李白の生年は、唐武則天（則天武后）の長安元年（七〇一）であるから仲麻呂とほぼ同年代（「古今和歌集目録」の没年に従えば同年）である。従来の李白伝記研究では、李白は天宝の初年に玄宗の詔を受けて長安に赴き、足かけ三年ほどの宮廷での生活の後、側近との軋轢が要因で長安を去ったとされてきた。今日では天宝初年以前にもう一度短期間の滞在があったとするいわゆる長安在住二回説が主流になっている。[*25] しかし、李白の伝記的外部徴証は少なく、内部徴証とする詩一千首は、個々の作品の制作状況のはっきりしているものが少なく、盛名に比して不明な点が多いのが実情である。

仲麻呂と李白の出会いも「李白が四十余歳にして玄宗の朝廷に翰林学士として出仕するに至った天宝の初頃」と考えられ、「仲麻呂が既に大約二十年の歳月を都長安で生活してから後のこと」[*26] であるとされているが、どのような出会いであったかは不明である。通説では、仲麻呂が儀王友であり李白が翰林供奉であったとき、宮廷での出会いであったろうと推察されている。李白が玄宗に仕えたときは、翰林院の制度は改められ、翰林供奉が翰林学士となっていたが、唐代の翰林学士は「天子の顧問に備えて翰林院に詔を待つ文学の士の呼称である」[*27] とされる、天子直属の私的な側近のようである。

仲麻呂は、当代一流の詩人であった王維や包佶、趙驊などとも交友があったから、李白との交友を支えたものは詩文を中心としたものであり、宮廷詩人としての李白の活動への仲麻呂の敬愛だと考えられる。帰国に先立って、彼等が仲麻呂に送別の詩を贈っている。仲麿もまた、「命を銜(う)けて国に還るの作」と題する詩を中国の友人たちに贈っているが、李白の送別詩はない。二人が天宝の初めに交友を結んだとして、李白はまもなく長安を去っているから、仲麻呂の遭難時には十年あまりの時を隔てていることになるが、「明月帰らず」と嘆ずる李白の悲しみには、互いに時を隔てて多年会うこともなかった旧友の死を悼むものとは思えない悲痛さがある。黒川洋一氏に「仲麻呂が帰国に際して必ずや別れを告げるべく李白のもとを訪れているに相違ない」として、その根拠に李白の詩「王屋山魏万の王屋に帰るを送る」(『李太白文集』一四)をあげる[*28]、きわめて説得力のある考察がある。

一般に「日本は中国からは太陽や月が昇る東の方角に当たるので、帰国する使者とか僧侶を送る詩には明月という語で日本(人)を表現することが多い[*29]」というのだが、A・ウェイリーは李白の詩句「明月帰らず碧海に沈む」が仲麻呂の「天の原」の歌(ウェイリーは漢訳されたと考える)を意識した詩句ではないかというのである。それを紹介した前記小川環樹論文は「仲麻呂が作ったうたを、李白が想起しつつ作ったとすると、確かに読者の(ことにわれわれ日本人の)心を動かすことはいっそう強くなる」という。

「天の原」の歌を知っていた、あるいは歌を訳した漢詩を李白が知っていた可能性があるという考えは、李白の詩が仲麻呂歌の作歌事情を解く鍵を潜めていると考えることである。

そして李白が仲麻呂の歌を知っていたという考えは、李白の「哭晁卿衡」の詩を貫之が知っていたのではないかという考えに導く。貫之はその「明月不帰沈碧海」の詩句を想起して「青海原」の句をなしたのではないかという

考えに至る。「碧海」はすなわち「青海原」にほかならないからである。

平安朝の中期ぐらいまでの詩文には、「文選」「白氏文集」の影響が圧倒的で、李白の影響は極めて少ない。しかし、平安初めまでには李白の詩がある程度まとまった形で入っていたであろうことは定説となっている。藤原佐世『日本国見在書目録』に「李白歌行集三」とみえ、大江維時の『千載佳句』に李白の詩句が引かれていることなどがそれを証している。

萩谷朴氏前記『土佐日記全注釈』には、「土佐日記」十二月二十七日に、李白詩「贈汪倫」（『李太白文集』巻十二）、一月二十七日に「単父東楼秋夜送族弟沈之秦時凝弟在席」（「李太白文集」巻一四）が踏まえられていると指摘されている。これに関連して「『古今集』撰者グループの貫之・忠岑・躬恒に共通して李白受容のあとがみられる」[*30]という指摘もある。

「哭晁卿衡」の詩が貫之の知るところであったか、それを証すものはないが、「天の原」の句を「青海原」と改変する貫之の脳裏にこの詩の「沈碧海」の存在を考えることができるのではないか。当日の景に合わせた便宜的改変ではなく、仲麻呂と李白の交友にも思いを馳せる貫之の憧憬を潜めた意図的な改変であったと考えたい。

「白雲は愁色をたたえて蒼梧の山に満ちている」という結句の「蒼梧」は、伝説上の古代の聖王舜が蒼梧の野で崩じ、舜を葬った湖南の山九疑山が蒼梧の山であるという。李白の詩句は、今日も舜が崩じたそのかみの日と同じく、蒼梧の山には白雲が憂わしげに立ちこめている、と仲麻呂の死を悼む。

貫之は土佐在住の間に、宇多天皇・醍醐天皇・右大臣藤原定方・中納言藤原兼輔ら、彼が絶大な尊敬と信頼を寄せていた主君、庇護者を次々と失っていた。都へ帰還してまもなくの、土佐日記執筆時の貫之の心境を窺わせるも

のに、『新撰和歌集』の序文がある。『新撰和歌集』は醍醐天皇の勅命を藤原兼輔を通じて拝受し、土佐守在任中に完成させていたが、延長八年（九三〇）九月醍醐天皇、承平三年（九三三）二月に兼輔を失い、勅撰集への道を絶たれ空しく筐底に収めるほかなかった。序文は帰京後天慶三年（九四〇）までの期間に付せられたものと考えられる。心の支えを失った空しさが彼の内部に広がっていたのである。

貫之秩罷帰日、将以上献之、橋山晩松、愁雲之影已結、湘浜秋竹、悲風之声忽幽。伝勅納言亦已薨逝。空貯妙字於箱中、独屑落涙于襟上。

「貫之、秩罷（つかさや）んで帰る日」は、土佐守の任果てて都へ帰ったことに他ならない。私が惹かれるのは、「湘浜の秋竹、悲風之声忽ち幽なり」という貫之の表現である。中国古代の伝説上の聖王舜は堯の二人の娘、娥皇・女英が妃であった。舜が崩御し蒼梧に葬られた時、墓前に慟哭した娥皇・女英二人の涙が近くの竹に降りかかって「斑竹」となったと伝える。貫之が「湘浜の秋竹」というのはこの伝説を踏まえた成句である。仲麻呂の死を悼む李白と醍醐帝の崩御を悲しむ貫之が帝舜の伝説を踏まえた詩句を引くのは、全くの偶然の一致にすぎないだろうが、貫之が仲麻呂の死を悼む「哭晁卿衡」を知り得たとしたら、「白雲愁色満蒼梧」の詩句に誰よりも深く感動し、李白と仲麻呂の交友に強い憧憬を抱いたにちがいない。

結び

日本での勉学と生活に、多くの困難を抱えながら苦闘している留学生を見るにつけ、その昔、遣唐使とともに中

国に渡った留学生阿倍仲麻呂とその歌に関心を強くしていた。

二〇〇四年、遣唐留学生であったと考えられる井真成の墓誌が西安で発見され話題を呼んだ。墓誌によれば井真成は唐の開元二十二年（七三四・天平六年）長安において三十六歳で没した。逆算して文武天皇三年（六九九）の生まれと知られる。養老元年三月渡唐した第九次遣唐使（七一七）に随行した留学生であったと考えられるから、阿倍仲麻呂と同行した、ほとんど同年代の留学生であったことになる。井真成は中国名であり、日本名はつまびらかでないが、鈴木靖民氏に詳細な考証があり、河内国志紀郡井於郷を本拠とした井上氏の出身かとされる。[*31]

遣唐留学生として中国に渡り、志半ばにして故国の土を踏むことができなかったものたちは井真成をはじめ多数あったに違いない。仲麻呂をめぐる伝承は、小川環樹氏がいうように、「行いて帰らざる人々を思う情を代表するゆえに、語り伝えられたのであろう」[*32]し、その数多の遣唐使、あるいは遣唐留学生の鎮魂の思いが仲麻呂の伝誦歌を支えてきたのである。

要するに、仲麻呂の伝誦歌を採歌した古今集撰者として、貫之は仲麻呂をめぐる伝承に強い関心を抱き、史的事実をかなりな程度知り得ていた。自らの土佐日記に仲麻呂の伝誦歌の初句を「青海原」としたのには、万葉の撰者でもある家持の歌と小野田守をめぐる史実への関心が窺われるのである。また「青海原」は李白の詩句「明月帰らず碧海に沈む」が形を変えて引かれている可能性があり、唐の詩人李白と仲麻呂との交友への憧憬が深く潜められているように思われるのである。

貫之は、室津の船中で海上の月を眺めながら、自らの焦燥と望郷の想いを、遣唐留学生仲麻呂に重ねるとともに、波濤万里を隔てた彼の地に苦闘した先人への思いを見つめていたのである。

（二〇〇六・五・二八）

註

＊1 本文引用は「新日本古典文学大系」『古今和歌集』による。
＊2 A・ウェイリー著、小川環・栗山稔訳『李白』岩波新書　一九五〇年。
＊3 小川環樹「三笠の山に出でし月かも」一九六七年九月「図書」、のち一九八七年一月「談往閑話」筑摩書房。
＊4 杉本直治郎「阿倍仲麻呂の歌についての問題点」「文学」昭和四三年一一月号。
＊5 桜井満「三笠の山の月――阿倍仲麻呂の歌をめぐって」『日語学習与研究』一九八三年第四期　一九八三・七
＊6 黒川洋一氏は「土佐日記」にもとづいて付加されたものと考えている（「阿倍仲麻呂の歌について」「文学」昭和五〇年八月号）。前掲＊4杉本直治郎氏も「左注の成ったのは、『土佐日記』の承平五年を上限とし、左注とほとんど同内容の記事を載せている、『今昔物語』の著者源隆国の没した、承暦元年（一〇七七）を下限とする」という立場である。
＊7 鈴木知太郎著『小倉百人一首』桜楓者　昭和四四年一一月刊。
＊8 池田弥三郎『百人一首故事物語』河出書房新社　昭和四九年一一月刊。
＊9 杉本直治郎「阿倍仲麻呂の歌についての問題点」「文学」昭和四三年一一月号。
＊10 萩谷朴『土佐日記全注釈』角川書店　昭和四二年八月。
＊11 「続日本紀」養老元年二月壬申朔に「遣唐使、神祇を蓋山の南に祀る」とある。
＊12 「万葉集」巻一九、四三六四の光明皇后歌他。
＊13 鈴木靖民「阿倍仲麻呂在唐歌について」『古代対外関係史の研究』吉川弘文館　昭和六〇年一二月刊。
＊14 本文は「新日本古典文学大系『土佐日記　蜻蛉日記　紫式部日記　更級日記』による。
＊15 清輔本「古今集」の傍注、藤原教長「古今和歌集注」に「三笠のやまに」を「三笠の山を」としたものがあるが、「青海原」としたものはない。
＊16 「新日本古典文学大系」『土佐日記』脚注。
＊17 「日本古典文学全集」『土佐日記』頭注。

＊18 萩谷朴『土佐日記全注釈』角川書店　昭和四二年八月刊。
＊19 『阿倍仲麻呂伝』（昭和一七年）は未見であるが、前掲＊4「阿倍仲麻呂の歌についての問題点」にも同趣旨の記述がある。
＊20 前掲＊4による。
＊21 板橋倫行「阿倍仲麻呂の見た月」『日本歴史』第一〇三号　昭和三二年一月。
＊22 増村宏『遣唐使の研究　第三章遣唐大使藤原清河の抑留』同朋舎出版　昭和六三年一二月。
＊23 新日本古典文学大系『続日本紀』三。
＊24 前掲＊22に同じ。
＊25 松浦友久『李白伝記論――客寓の詩想』研文出版　一九九四年九月刊。
＊26 大野実之助『李太白研究』早稲田大学出版部　昭和三四年四月刊。
＊27 前掲＊25。
＊28 黒川洋一「阿倍仲麻呂の歌について」『文学』昭和五〇年八月号。
＊29 筧久美子『鑑賞中国の古典一六　李白』角川書店　昭和六三年八月刊。
＊30 仁平道明「『伊勢物語』二十三段と李白「長干行」」『鑑賞中国の古典一六　「李白」』角川書店　昭和六三年八月。
＊31 鈴木靖民「遣唐使井真成の出現――入唐・本名・改名・出自」札幌大学文化学会『危機と文化』8号　二〇〇六年詩月。
＊32 前掲＊3に同じ。